

アルバム

寄贈／小田和幸

小田一彦さんは広島工業専門学校 1 年生。爆心地から約 2100 メートルの学校内で被爆。十日市町にあった自宅は焼け落ち、母・トヨミさんと妹・澄江さんは原爆で亡くなった。このアルバムには、在りし日の家族の姿、学校の仲間たちとの写真など、一彦さんの大切な思い出が詰まっている。

それから 48 年後、「四十八年目、初めて語る体験」と題して、一彦さんは手記を残した。

(一部抜粋)

「あの日の出来事を話したり、書いたりする事はとても出来ませんでした。語り継がなくてはならないと決心するまでに四十八年の歳月を要しました。(中略)

両親や兄弟と仲良くしている級友などを見ると、羨ましく、自分の不運を嘆き、学生時代も夜寝床で何度涙を流した事か、あの時、家族と共に死んだ方が良かったのではと思った事が何度もあります。でも現実には私は生きています。原爆の悲惨な体験をした事を多くの人々に語りつがなければならないと考えました。地球を人間の住む星として残したいと思うなら、皆さん原水爆の恐ろしさをよく考えてみて下さい。」



トヨミさん



一彦さんと澄江さん



西九軒町 近所の子どもたちと。左端が澄江さん